高知県日高村で始まる「アーティスト×○○」

AIR HIDAKA は参加者が日高村に 14日間程度滞在し、日高村に住む様々な方と出会い、交流を育むプログラムです。滞在中に日高村で作られた農作物や美しい景観、古くから伝承されている文化や伝統といった魅力や価値に触れる事で、参加者の価値観にも変化が生まれるかもしれません。また滞在期間中に日高村で働く事で、働きながら制作活動をするのか？アートから離れてみるのか？改めてアートについて深く考えるのか？アーティストであることをすっかり忘れる時間にするのか？それは参加者の自由です。2021年にスタートしたこの新しい試みに参加した二組のアーティストと受け入れ事業者を紹介します。

壬生ファミリー

壬生農園

カウンターパート

アーティスト
滞在先

日高村役場から車で約 30 分、仁淀川に面した鴨地というところで、ショウガや文旦を生産している壬生さんご一家の別棟に住み、歩いて 1 分の出荷場で収穫されたショウガを一定のサイズに切り揃え、芽を取る作業が日課。内一日はショウガ畑に出て、土の中からショウガを掘り出す肉体労働にも従事した。作業をおぼえるスピードと、おぼえてからの手際のよさに同僚は感心し、ダンスで使う筋肉と作業で使う筋肉の違いについて語る久保田さんを通してコンテンポラリーダンスに触れた。仁淀川で試した釣りの手ほどきは、小学生の壬生さんのお子さんから。

コロナ渦が、地域と舞台芸術のことを考えるきっかけになった。その延長に日高村があった。

久保田 舞 ／ダンサー

Mai Kubota

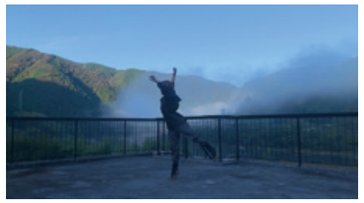
滞在：10 月 28 日～ 11 月 6 日
働いた日数：7 日間
住まい：壬生家別棟
仕事場：壬生農園ショウガ出荷場と畑
仕事の内容：収穫されたショウガの芽取作業ほか

普段と異なる環境に身をおいて活動をしたいと思うきっかけとなったのは 2020 年上半期頃、予定していた舞台等の仕事がキャンセルになったことでリハーサルや本番で都内まで出ていくことが無くなり、多くの時間を在住する埼玉県川越市で過ごしていました。その中でいつもは見えてこない人の流れや街の歴史に興味が沸き、協力してくださる人との出会いもありながら場の魅力におされて地元で公演（ 野外パフォーマンス) を企画しました。

劇場ではない空間で、特に地元の方に観てほしいという想いで公演を行った際に作品制作のプロセスにおいてダンサーや振付家だけでとどまらず、地域の方の協力を受けて作り上げた空間に今までにない興奮を覚えたと同時に、更に地域に根付いた活動ができないかや、他の地域にも足を踏み入れてみたいと、自身の活動方針が変化していきました。

普段経験できない環境に身を置き、土地や人々に触れながらその場でうまれたものや感覚を表現として残したり、あるいは作品にしなくても、さまざまな滞在経験をこの先の活動に活かしていきたいと考えています。新しい場や仕事に触れてみたいと思う中で今回の滞在がその一歩になり、活動を通じて日高村の魅力を外へ発信したり、日高村にも還元できるような滞在を目指せたらと思います。（エントリーシートより）

2020 年川越市小畔川河原にて企画した『まほろばや』



滞在場所屋上にて毎朝のルーティンとして身体をうごかす

Profile

1995 年生まれ。埼玉県立芸術総合高校にて舞台芸術を学び、大東文化大学スポーツ科学科入学後モダンダンス部に所属。卒業後は作品制作・上演を国内外で行いフェスティバルでの作品上演や、シンガポールではレジデンスを経て現地アーティストと共に作品制作に取り組んだ。近年は他ジャンルアーティストとの共演や、オペラへのダンサー出演、在住する川越市にて野外パフォーマンス企画の開催に取り組むなど活動の幅を広げている。

*M1 Contact Contemporary Dance Festival/ NDA International Festival / 福岡ダンスフリンジフェスティバル / TPAM

受賞歴：座・高円寺ダンスアワード / 横浜ダンスコレクション 2017 コンペティションII 奨励賞 / HDP ~ 新たなる挑戦 ~ コンペティション部門 鈴木ユキオ賞

葉栗 翠 / 美術家

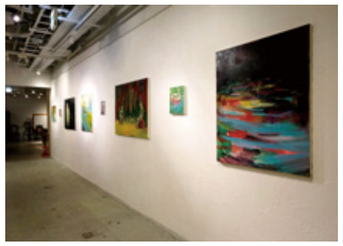
Midori Haguri

滞在：12 月 6 日～ 12 月 19 日
働いた日数：10 日間
住まい：日高村お試し滞在住宅
仕事場：日高みよし農園　ハウス
仕事の内容：トマト収穫や葉の剪定など

当初は川についてのリサーチをする計画でしたが、滞在中一番考えさせられたのは「食べる」とは何かということでした。どんな生物も何かしらの生物の命をいただいて生きています。滞在前トマト農家で作業というと牧歌的でロハス的なイメージを持っていましたが、ハウスの中はとても機械的で、すべてを管理している工場のようでした。そしてそこで働く一人一人がそれぞれ歯車となり、責任を自覚してその役割を正確にこなすことで質の良いトマトを安定的に生産できるのだと改めて認識しました。反対に山の中に分け入って行う狩猟では、罠にかかっていればその命を自らの手で殺し食べる、罠にかかっていなければ諦めて下山するという人知の及ばない自然との対話を見ることができました。大花地区でのこんにゃく作りに参加した際は、自生しているコンニャクイモを使って、かつてはそれぞれの家庭でこんにゃくを作っていたそうですが、高齢化が進み、作り手が減少しつつあるため、移住された方が地域のお年寄りから作り方を習ったとうかがいました。

日高村の圧倒的な自然の恵みは都市部で育った私の想像を悠々と超えていきます。しかし不安定で労力もかかるため、狩猟やこんにゃく作りなど自然の恵みをいただく行為が今後も継承されていくのか気がかりです。ただ俯瞰してみると、このように思うこと自体が、稀人として訪れた私の戯言なのかもしれません。しかしながら少なくとも日々食べている物について、それがどのような経緯で私の胃の中に入っていくのか、延いては菜食主義や都会で食べるジビエについて考えるきっかけになりました。能津での最後の夜、「また戻ってくるろ？ 」と隣のおんちゃんが夏に仁淀川で獲った鮎を焼きながら言ってくれました。まだ今は日高村での経験がどのように制作につながるか想像ができませんが、確実に私の血となり肉となりました。そして日高村が私にとって知らない場所からいつでも戻ってこられる場所になった事実を、横浜に帰ってきてもにやにやしながら噛みしめています。（参加レポートより）

《Zoo（サイン）》キャンバスにアクリル
1167×1167mm 2019
Photo by Yasuyuki Kasagi



「戯れる、あるいは溺れる。」会場風景
BUKATSUDO GALLERY / 横浜　2021
Photo by g.natsumi

Profile

横浜育ち。2009 年武蔵野美術大学油絵学科卒業。見過ごされている土地の記憶を手掛かりに、見えるもの見えないもの、忘れるもの忘れられないものをテーマに作品を展開。近年は画材の持つ魅力に着目し研究を続けている。主な個展に「戯れる。あるいは溺れる。」BUKATSUDO GALLERY, 横浜（2021）。グループ展に「食と現代美術 vol.8」BankART station、横浜（2021）「黄金町バザール 2020」黄金町界隈 , 横浜（2020）、「Koganecho in Wonderland」space 55 , 韓国（2019）、「東アジア文化都市交流展」泉州市交通歴史博物館 , 中国（2019）、「沈殿」space ppong , 韓国（2018）等

三好ファミリー

日高みよし農園

カウンターパート

アーティスト
滞在先

トマトで有名な日高村に移住し、2021 年からトマト農家として独立した三好さんご夫妻と保育園に通うお子さんがカウンターパート。記念すべきみよし農園のトマト初収穫に立ち合い、貴重な戦力としてひたすらトマトをもいだ。決して身近とはいえないアーティストという存在を知り、日高村の子どもたちの世界が広がることを三好さんは期待している。

レジデンスに参加すると、自分の絵が変わることは確か。